

逸見久美 (いつみ・くみ)

大正15年 兵庫県芦屋に生まる。
 昭和22年 青山学院女子専門部国文科卒業。
 昭和25年 早稲田大学文学部国文科卒業。
 昭和28年 同大学院修了。
 昭和48年 実践女子大学文学研究科博士課程修了。
 昭和52年 実践女子大学より学位授与さる。
 現在 青山学院大学、同女子短期大学講師。

みだれ髪全釋

検印省略

(〇三)二九一五六六一(代) 振替 東京 六一一八〇二〇	(株) 桜楓社	〒101 東京都千代田区猿樂町二一八十三	著者 逸見久美 発行者 及川篤二 印刷者 柏原義治	昭和五十三年五月三十日 初版印刷 昭和五十三年六月三日 初版発行

定価は箱に表示
 してあります。

冬より夏

みだれ髪と髪

梅楓社

は し が き

一、本書『みだれ髪全釋』は初出明確なものに限り、製作年代順に分け、歌のはじめに初版本『みだれ髪』の通し番号をつけた。明治三十三年四月から三十四年八月までの歌は二八八首で、それらを番号順に排列して、先づ通解し、初出不明なものは初出の定かな歌のあとに番号順に解をほどこした。

一、『みだれ髪』は明治三十四年八月刊行で、同月の「小天地」に発表された歌の中に『みだれ髪』に収録されたものがあつたのでそれも初出として掲載した。佐竹籌彦氏の『全釈みだれ髪研究』では初出明確な歌数が二八四首である。これは鉄幹あての晶子書簡中にある220 243の歌が掲載されていないからで、『みだれ髪攷』はそれらを入れて二八六首としている。本書はさらに196 269を加え二八八首とし、さらに中皓氏の『星光』について「〔国語国文〕29巻3号〔昭35・3〕の論文に掲載された242 340 341 342を加えて二九二首とした。また明石利代氏の『関西文壇』の形成」に「半秋」十七首中五首が引用されてあつたなかに359の歌があつたのでそれも加えて二九三首とした。

一、本文は凡て初版本のまま掲載し、誤植は指摘したが、訂正していない。『みだれ髪』刊行後、「明星」十五号（明34・9）の六十三頁に「みだれ髪の誤植」の欄に指摘されている（本書288頁参照）。この他にも明らかに誤植と思われるものもあつたから、その都度、説明を加えておいた。誤植の訂正されているものは殆んど初出の形に戻っている。本文と校異は原文のまま表記した。

一、一首毎に校異、語意、解釈、鑑賞をほどこし、必要に応じて参考の欄を設けた。そして年代毎にその頃の晶子の生活や文学上の環境、とくに鉄幹との出会い前後については書簡を中心に解説を加えた。

一、一首毎に歌の下の（ ）の中には各巻の名を記した。題名と発表年月及び掲載誌と号数を記し、新聞は年月日を記した、署名は晶子以外の名を用いている場合に限りその名を明らかにしておいた。そのほか、三版（再版ナシ）、新潮社の『晶子短歌全集第一巻』（大8・10刊）、改造社の『與謝野晶子全集第一巻』（昭8・9）によって歌の変遷を示した。校異の中で（ ）の数字は一首中の一句から五句までの語句を示すもので、削除されたり、新たに付加された歌は記載していない。本文（初版）と同一のものは「初版同」とした。

一、参考欄には『新派和歌評論』（黒瞳子Ⅱ明34・10刊）、『新派和歌大要』（鉄幹、栗島狭衣合著Ⅱ明34・6刊、「鉄幹歌話」を再掲したもの）、晶子自釈の「紅梅日記」（「少詩人」1号Ⅱ明35・2）、『歌の作りやう』（大4・12刊）を掲載した。『新派和歌評釈』（姫河原無鳴Ⅱ明41・8刊）は右の『新派和歌評論』と殆んど同一に近いもので、多少の変化がある位である。現代の批評として『みだれ髪を読む』（佐藤春夫Ⅱ昭34・6刊）を要約して鑑賞欄に必要に応じて略記した。この場合「春夫云々」と記しておいた。また『全釈みだれ髪研究』も必要に応じて同じく鑑賞欄や参考欄に入れておいた。

みだれ髪全釋

目次

はしかき

『みだれ髪』全釈

明治三十三年

四月 : 九

八月 : 二〇

十一月 : 四八

明治三十四年

一月 : 六五

四月 : 一二八

七月 : 一七〇

初出不明

..... 二一九

六月 : 一〇

九月 : 二四

十二月 : 五八

二月 : 八四

五月 : 一三二

八月 : 二〇九

七月 : 一四

十月 : 三三

三月 : 八九

六月 : 一六五

『みだれ髪』の成立まで	二八九
『みだれ髪』について	三〇二
各巻について	三一一
『みだれ髪』所収及び拾遺の歌の収載年表	三二八
『みだれ髪』初句一覧	三三四
あとがき	三三九
初句索引	三四三
引用詩歌索引	三四九

『みだれ髪』全釈

350 大御油ひひなの殿にまゐらするわが前髪に桃の花ちる（春思）

初出 新星会（よしあし草25号＝明33・4）（2）雛の殿に（4）吾前髪に 小扇（明星3号＝明33・6）（2）ひいな
の殿に（4）我が前髪に

【語意】 大御油―大殿油の誤植か。大殿油は御殿で使用する灯油で、ここでは雛壇にともしてある雪洞のあかりのことであろう。

【解釈】 雛祭の日、きれいなお雛さまが飾られてある雛壇に雪洞のあかりをつけようとしてそこに生けてある、桃の花に触れてしまった。そのためだろうか、花びらが私の前髪に触れてはらはらと私の前に散りかかってきた。

【鑑賞】 この歌は集中での制作年代のもっとも古い歌である。「新星会」四首中の一首で、三十三年の四月に発表されたのだから、作ったのは三月ごろであろう。この頃から七月ごろにかけて晶子は覚応寺の嫡子であり、同じ「関西文学」の仲間で歌友であった河野鉄南に頻繁に手紙を送っている。それは恋に恋するようなロマンティックな夢多き乙女のころのことと彼に淡い慕情を覚えていた。乙女である自分の目前にあった雪洞にあかりをつけようとしたのであろう。雛祭の準備をする美しい乙女のふとしたしぐさが髻髻と描かれている。わがとあるから作者自身の追憶であろう。分りやすい歌である。第一句に「大御油」とあることから全体的に王朝的な気分が醸し出されている。

【参考】 「明星」十六号（明34・10）にあるなにがし（上田敏）の「みだれ髪を読む」に「大御油の文字、典據疑はしく……」とあり当時すでにこのことは疑惑を感じさせていたことが分る。晶子の未熟さからこのように誤ったのか、無意識にやったものか、それを敢て鉄幹が訂正しなかったのは原作をそのまま重んじたためだろうか。集中に誤植の歌がいくつかあるがそれらについて「明星」で訂正しているものもあるがこの歌は訂正されていない。

154 小百合さく小草がなかに君まてば野末にほひて虹あらはれぬ (蓮の花船)

初出 小扇 (明星3号 || 明33・6) (1)(2)さゆりさく小草が中に 三版 初版同 新潮 (2)(3)草生くさうのなかに君

待てば 改造 (3)君待てば

【解釈】 夏のある日、百合の花が美しく咲き乱れている草原であの方を待っていた。すると野原のずっと向うの方が匂やかに明るくなってきたかと思うと急に虹が現われた。

【鑑賞】 可憐な乙女が恋人を待っていると虹が乙女の目前に表われた。虹は恋の象徴だといわれているがまだ恋しい君は現われない。虹の美しさに陶醉する乙女の姿そのものが恋の化身のようにも思われる。ロマンティックな美しい歌である。分りやすい歌である。虹は集中恋の象徴としてよく駆使されており、吉報をもたらすものとされている。この歌も乙女の心に吉報をもたらす虹が現われたことによって恋をさらに美しく夢多きものになっている。

237 野茨のばらをりて髪にもかざし手にもとり永き日野邊に君まちわびぬ (はたち妻)

初出 小扇 (明星3号 || 明33・6) (1)野ばら折りて (3)(4)手にも持ち永き日野べに 三版 初版同 新潮

(1)野茨のばらを 改造 (5)君待ちわびぬ

【解釈】 日ながの初夏のころ、恋しい人と会う約束をして私はいつまでも野辺で待っているがなかなかやって来ない。私は退屈まぎれにそこに咲いている野ばらを折って髪につけたり手に持ったりして楽しんでいる。

【鑑賞】 今か今かと恋人のくるのを待つ、浮き立つような気持を表わしている。平凡な情感だが、飾り気のない可憐さを率直に歌い上げているところがよいと思う。ありふれた乙女心の一挙一動に作者のロマンの夢を托している。154の歌と共に待つ身の焦燥や悩みより、むしろ恋人を待つ身の雀躍とした思いを軽快にごく自然に表わしている。また普遍的な青春の心象を美化し、明朗に表現している。

349 卯の衣（てま）を小傘（かさ）にそへて褌とりて五月雨わぶる村はづれかな（春思）

初出 小扇（明星3号＝明33・6）(1)(2)卯の花を小傘（かさ）に添へて (4)五月雨わぶる（明星15号「みだれ髪の誤植」にあり）三版・新潮・改造 (1)卯の花を

【語意】 卯の花―うつぎ（空木）の花のこと。空木はユキノシタ科の落葉灌木、山野に自生、高さ一・五米内外、葉は対生、卵形でとがり細い鋸齒（きこし）がある。四、五月ごろ円錐形、白色の花をつける。八重の花をつけるものは観賞用。若枝の内部がうつろなのでこの名がある。 わぶる―詫ぶ、困る、当惑する、迷惑に思う。 褌―つま（端）の意、着物の左右の両端の部分の称。

【解釈】 雨傘の柄に卯の花をつけ、着物の褌をとって降り続く五月雨の中を濡れないように村はづれ迄やって来た。すると雨のため道がすっかり泥濘（ぬじ）んでいて、私は着物の裾が泥だらけになるのではないかと困ってしまった。

【鑑賞】 五月雨を背景にした女の粹（いき）な容姿を美しく捉え、日本画の情趣を思わせる抒情性豊かな歌である。作者の体験か、又は五月雨からこうした女の姿を連想したのであるうか。日本婦人の典型的な美しい容姿を思わせる。

【参考】 私は或村はづれで雨傘の柄に卯の花を添へて持つて、片手で褌を取りながら降り止まぬ梅雨の日の泥濘に困つて歩いてゐる。（『歌の作りやう』）

368 花にそむきダビデの歌を誦せむにはあまりに若き我身とぞ思ふ（春思）

初出 小扇（明星3号＝明33・6）(2)(3)ダビデの歌を誦せんには 三版 初版同 新潮 いにしへのダビデの歌をうたふにはあまる若さと思ひけるかな 改造 (2)(3)ダビデの歌を誦せんには

【語意】 花―人生の花即ち青春のこと。 ダビデ David (David)―古代イスラエル第二代の王（在位 Ca. 1004―965 B. C.）。旧約聖書のサムエル前書第十六章から列王紀上第二章迄及び歴代志上第十一章から二十九章迄記述があ

る。牧童から身を起し、サウル王に愛され、その婿にえらばれたが、軍功を立て国民の人氣が高まるとともに王に嫉まれユダの荒野に逃れた。ここであふれ者を集めて勢力を貯え、敵国ペリシテ（フィリステア）の客将となった。サウルとその子の死によって統一イスラエルの王となり、イスラエル史上最大の王国を築いた。彼は詩と音楽の才能をもち、多く詩篇の作者に擬せられている。彼の人柄と王国とは伝説化・理想化され、その子孫からは彼の再来としてのイスラエル再興の神的王、メシア即ちキリスト（ダビデの子）が生れると信ぜられた。西歐に於て多く文学・美術の主題となつて取材されている。

【解釈】 青春の花である恋愛を拒否した旧約聖書に書かれてあるダビデの詩を口誦んだりしてキリスト教的な生活で我が身を縛ろうとするには私は余りにも若すぎる。私は今、宗教や道徳で自分を律して青春を全く無視してゆくことはできない。まだこんなに若いのだから青春を思うままに生きてゆきたい。

【鑑賞】 当時にあつてはキリスト教は斬新な思想であり、ダビデを駆使したところにこの歌のハイカラさがある。集中に於て他にも「213：聖歌のほひ」「215：なげし聖書を」「216聖書だく子」などと取材されている。また同じ頃の鉄南あて明治三十三年六月二十二日の晶子書簡にも旧約聖書の中のソロモンについて「白百合いまは香もうせたれどソロモンの栄花の百合の花にはおよばざりしとか……」とあり、晶子はどこ迄聖書を理解していたか分らないが、少しでも歌の中にキリスト教的なものをとり入れて斬新さを匂わせていたことが分る。この歌のようにダビデを駆使しながら、宗教的なものを否定して、もっとも人間的な恋愛を謳歌し、人間主義を誇示しようとしたものは集中に多い。ここに晶子らしい生き方が強調されていると思う。

以上が三十三年六月迄の「明星」に載せられた歌である。このころ晶子はその年の一月六日の手紙を筆頭に、河野鉄南と盛んに文通していた。鉄南への思慕は勿論だったが、この頃はすでに鉄幹の存在を意識して鉄南に書

き送っている。四月に「明星」が創刊され、五月の「明星」二号から晶子の歌が掲載されるようになったので鉄幹自身も晶子について同号の「歌壇小観」に

会員中に妙齡の閨秀で晶子と云ふ人の近作の中に

と紹介し二首の歌を掲載している。この記事をみて晶子は早速鉄南に

鐵幹さま妙齡などおかし遊ばし私はづかし御座候（5月4日）

と書き送っている。「明星」の同人になった晶子は鉄幹から文を受けたらしく

この間與謝野様より御文ありてこれを河野君にも見せよとありしかど私自身に過分なる御ことば多きかの手紙ひと様に見せらるべしや（5月18日）

と書き、さらに六月十三日の書簡にも鉄幹から便りがあつて宅雁月が上京したことを報らせて来たとある。そして鉄南と自分との仲について

鐵幹様にはあなた様と私とはあした夕にあひ見まゐらすことかのふ友がき中よとおもひ居させ給ふらんかとぞんじ候さる身なりせば何かなげかむに候

と書き、さらに

この秋鐵幹さまこちらへお出で遊ばすとかあふてやらむと仰せられ候が今よりはづかしきことと思ひ居候その時やあなた様にもと今より夢のやうなはかないことを期し居り候……

と鉄幹来堺の通知を鉄幹から受けて会うことが恥しいと書いているが、このころは鉄南への思慕の方が強いようである。その後の六月二十二日の書簡には、「失戀しても水蔭の詩のやうな失戀がしたく候花袋などの失戀はいやに候戀は死しても精神に光明があたへてあるごとくうれしく候」と書いているが、鉄南に関しては

あなた様失戀の實けんさせてやらむなど思されてはといまより御じたい申おき候と書き、弟が鉄南について「新小説」に掲載された鏡花の横顔の写真に似ているといつて大変はめていたが、自分にはわざとそしらぬ顔をして聞いていたと書いている。そしてまた

鐵幹様朝夕にあひ見まゐらす友がきとたしかに思ひ居られる由雁月様もの給ひ候

と意識して鉄南と自分との仲を鉄幹も雁月も単に「朝夕にあひ見まゐらす友がき」だとさらに強調している。二人の仲は單なる友情だと世間的には思わせているが、實際はそうでなく自分一人で燃え、あなたとは失戀の實驗などしたくないとはっきり書いている。それほど鉄南へ心が傾いていたがそれは片思いであつて晶子にとって鉄南はどこまでも兄のような存在であり「水のごときよきよき」方であり「悟りをひらきたまへる」人であつた。

このころの晶子にとって鉄幹はまだ未知の人であり、ただ文通のみで「明星」主幹という、自分にとってまだ距りのある人であつた。むしろ同じ街に住む鉄南への思慕の方がずっと強かつた。しかしそれは單なる淡い恋であり、一方的な恋にすぎなかつた。だからこの期の恋の歌は實感の伴わない、恋を夢みる幻想であり、空想であつたろうが、恋の情感を経験していたろうと思う。君を待つ氣持は現實性がなくてもやはり意中の人があればそうした實感はおのづと湧いてくるものである。その意味で、雛の歌や、小百合、野茨、卯の花などを取材して、自分の若い姿と心情をロマン的に促えたのである。そこに何の虚飾もなくひたむきな乙女時代の晶子の幻影が浮び上がってくる。ダビデの歌において晶子は戀愛至上を謳歌して情意の解放の第一声を放つたのである。

次に七月の「明星」四号の「露草」七首中から六首が『みだれ髪』に掲載された。

163 藻の花のしろきを摘むと山みづに文がら濡ぢぬうすものの袖（蓮の花船）

初出 露草（明星4号＝明33・7）（4）文がらひぢぬ 三版・改造 初版同 新潮（4）濡しつるかな

【語意】 藻——海に生える草全体で藻類、一般には水中に生育する植物の総称。
文反古。

【解釈】 暑い日、山に行くとき池に白い藻の花が咲いていた。私はそれがほしくなり、摘もうとして手をさし出した。うっかりしていた私は着ていたうすものの袖を池の水で濡らしてしまった。気がつくとき袂には手紙が入っていてそれも濡らしてしまった。

【鑑賞】 文がただから今の作者にとっては用済みになっているが大切な手紙であろう。ことさらにその文を取材して濡れたことを意味ありげに歌っているのだから恐らく恋文であろう。ふとした乙女の動作にすぎないが、何かそこにロマンの夢を托すゆかしさがある。藻の花の白さとうすものを歌っていることから夏の日だと思われる。山みづは山にある水溜りであろう。

164 牛の子を木かげに立たせ繪にうつす君がゆかたに柿の花ちる（運の花船）

初出 露草（明星4号＝明33・7）（4）君がゆかたに 三版 「牛」逆字 新潮 （4）一人の肩に 改造 （5）姉の花ちる

【解釈】 夏の日、子牛を木かげに立たせてそれを絵に描こうとしているあの方の浴衣に柿の花がはらはらと散ってきた。

【鑑賞】 木かげとあるから日ざしを避け涼しいところを選んで小牛を立たせたのであろう。また柿の花の散る頃は初夏である。このころ鉄南と頻繁に文通しているから、この君は恐らく鉄南ではないかと思われる。鉄南は趣味として絵を描いておりその絵も現存している。平易で癖のない歌である。集中絵師の君と乙女の取合せの歌が多くあるからこの歌も若い絵師の君をほればれとした気分で眺めている乙女の姿が描かれている。この乙女は必らずし